

協働体験を持つことの可能性について

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
客員講師（インストラクター）

兵藤智佳

（ひょうどうちか）

プロフィール

東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター客員講師（インストラクター）現職。「経験や実践から紡がれる理論こそが社会の構造を変えることができる」と信じている活動家。専門は、保健医療とジェンダー。私の身体と心が「よい状態」であるということと社会との関係が活動の原点。日本や東南アジアでHIV／エイズやDV問題に取り組みつつ、「支援されながら支援する実践」を目指している。

「3年で新卒大学生の3割が最初の仕事をやめる」という時代である。もちろん、それが悪いと短絡的に問題化するわけではなく、大学がそれに対して何かしら行動すべきだということではない。そもそも大学は、利益を追求し国家経済を発展させるための企業戦士を育成する場ではない。学問の自由とは、それとは相反することも往々にして起こりえることであり、理念としては、大学はあくまで学生が「学問」を追究する場である。しかし、一方で、大学生の多くは卒業後に企業という場就職する。そして、多くの大学生にとって働くことはお金をもらうことの手段だけではない。自己実現や社会貢献の場としての職場を求め、そこに意味を見出そうとする。だからこそ社会貢献活動やNGO活動を一面的に理想化する傾向があり、ただお金のための仕事と感ずることがつらいのだと思う。そして、大学もまた教育理念として「社会に貢献できる人間を育成する」ことを謳う。さらに広くは、日本社会において、かつては終身雇用システムの中で企業も働く力を持った若者を育てる努力をしてきた。今、その体系が壊れつつある中で一休誰がどうやって若者たちを育てるのか。新しい時代に入りつつある中で人材の育成という意味が必要とされている教育と実践のあ

り方とはどういったものでありえるのか。

今回取り上げたWAVOCとザ・ボディショップとの連携活動事例は、体験学習という視点から企業人と大学生が社会貢献という場で協働する可能性を提示するものである。WAVOCは2006年より、ドメスティック・パイオレンスの被害者支援を協働するという活動から、現在にいたるまでザ・ボディショップと共に様々な実践活動を継続してきた（図1参照）。ボランティアセンターという機関を通じて大学が社会へ開かれ、大学と企業が連携することで、大学生たちが企業人と共に活動するという機会を創出してきた実践である。それらの活動の持つ意味

については、前出論文において、まずは大学生自身の視点から記述されている。そこから読み取れるのは、大学生にとってはなにより「場がつくり出すリアリティを持った想像力の喚起」という力学である。それは、企業や組織、社会貢献やボランティア活動などといったものについて、硬直したステレオタイプでしか想像できていない学生が、その有機的なあり方や関係性の複雑さに気づくプロセスとも言えよう。

「企業≠利益追求≠悪」という紋切り型の理解が、想いをもって働くプロフェッショナルな個人に接することで再構築されていく変容の中に、体験が与える教育的な意味を見出すことができる。また、学生にとって大学以外の広く社会の視線に曝され、自分が見られるという機会が「怖さと緊張感」をもたらし、何かをやらうとする動機を高めるものであることもよくわかる。

一方で、参加している企業の立場からも、大学と連携し社会貢献活動を実践することは、単に「自社ブランドのイメージアップ」だけではないことも藤田の記述から明らかである。今の時代、若い人材を育成することは企業にとっても危機感のある重要な課題であり、その指摘は、「若者に必要な力は何か」についての示唆的な提言となっている。そういう意味でもこれまでの

大学との取り組みに関しては、企業側にとっても新しい意義を見出すことができるように思う。もちろん、世界的に環境問題や人権問題に対する社会貢献を事業の理念として掲げるザ・ボディショップという企業の特長性も考慮に入れることは必要である。しかし、連携のもつ意味合いとして「社会へ貢献する活動」だけではない広く「人材を育成する試み」としての側面は、今後の可能性として強調しておきたい。

どのような実践においても「連携」や「協働」は、簡単ではない。特に、組織にはそれぞれの思惑や利害関係があり、対立を生み出す権力関係が生じることも自然である。それらの障害を乗り越えるためには、個々の人間が利

図1

これまでのザ・ボディショップとWAVOCによる協働活動

2006年夏 —— DV 被害者支援親子キャンプ
ドメスティック・バイオレンス (DV) 被害者女性と子どもへの支援を目的としたキャンプでの活動。

2007年夏 —— DV 被害者支援親子キャンプ
ドメスティック・バイオレンス (DV) 被害者女性と子どもへの支援を目的としたキャンプでの活動。

2007年夏 —— 韓国学生 DV 啓発セミナー
韓国の大学での社会啓発を目的としたキャンペーンの実施とセミナーの開催。

2007年秋 —— CSR シンポジウム「ビジネスを変える、社会が変わる
～ザ・ボディショップが創る「キレイ」な世界～」
早稲田大学にてビジネスと社会貢献をテーマにしたシンポジウムを開催。

2007年秋 —— ザ・ボディショップバリューズ推進室職員による授業での講演
WAVOC 提供科目「グローバル・ヘルス」にて、DV 問題へのザ・ボディショップの取り組みについて講演を実施。

害を調整し、折り合う努力はもちろんであるが、「何のために一緒にやるのか」に関する大きな目的の共有が求められる。これまでのWAVOCとザ・ボディショップとの実践を振り返るならば、社会貢献、社会変革のみならず一緒に働き、活動し、若者が体験する「場を創ること」が若者を育てるのだという認識の共有は、いろいろな分野を超えて人や組織を結びつける可能性を持つことを指摘したい。そして、教員としてコーディネーターとして実践してきた私にとっては、それこそが、「社会がみんなで若者たちを育てる」ということのひとつのあり方なのだと思う。

図2

協働体験で 創出されるもの

